

隣りには希望

奨励	金 伽耶〔きむ・かや〕
奨励者紹介	同志社女子中学校・高等学校嘱託講師（聖書科） 同志社国際中学校・高等学校嘱託講師（聖書科）

その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。

「いと高きところには栄光、神にあれ、
地には平和、御心に適う人にあれ。」

天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。聞いた者は皆、羊飼いたちの話を不思議に思った。しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。羊飼いたちは、見聞きたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

（ルカによる福音書 2章8―20節）

おはようございます。今日のお話を担当いたします、金 伽耶です。ご紹介にあったように、普段は同志社女子中高と国際中高で中学生、高校生を対象に聖書を教えるという仕事をしています。どうぞ、短い礼拝の時間の間ではありますが、よろしく願いいたします。

さて、先日インターネットのニュースで、大学生の読書量が随分と減っている、というような内容の見出しがありました。

大きな原因として、やはりスマートフォンの存在があるように思います。

かくいう私も、人のことは言えないぐらいすぐ触ってしまいますし、電車などの近い距離の移動中は良い暇つぶしのアイテムとして、また音楽を聴くツールとしてもはや手放せないものになってしまっています。電車の中をふと見れば、いい年をした大人たちも皆小さな画面に顔を向けている光景はもはや日常のものです。

そんななか、私立の制服やランドセルを背負って大人に交じって学校へ通い、家に帰る彼らの手には何らかの本や図鑑が必ずあって、それをこっそりと盗み見ては（盗み見る必要もないのですが）、とても愛しいような、少し、切ないような、何とも言えない気持ちで胸がいっぱいになることがあります。

皆さんは、本は読みますか。もしくは、読んでいましたか。

たとえば、「本を読む魅力は」と聞かれたら、皆さんはどのような自分の答えを出すでしょうか。おそらく、人それぞれに答えがあると思いますが、私は、自由にその情景や描写を想像できる、ということがあげられるのではないかとと思っています。文字だけで描かれるその世界を自分の頭のなかで具現化していく、そんな楽しみがあるのではないかと、何より私自身そういう楽しみ方で本を読んでいたことも多くあるので、小説の実写化などでは時々自分の想像と違ってびっくりしたり、少しがっかりしたりすることも多々あります。

羊飼いと天使

今日は、少し長い聖書箇所を皆さんと共に読みましたが、ご存じでしたか。聖書は本なんです。英語で「THE BOOK」と書けば、それはすなわち聖書を指すというほどに、「聖書」とは「本」の代名詞でもある存在なのです。

本を読む魅力である、文字だけの世界を自分で自由に想像する、という意味において、今日皆さんとお読みした箇所はとてもドラマチックで想像し甲斐のある、おすすめの箇所です。

羊飼いが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしている。今のように人工的な光などない時代、おそらくは真っ暗で、羊飼いたちの吐く息の震える音、羊たちのかすかな鳴き声以外はほとんどしないうような、しん、とした、そんな静寂な闇のなか。そこに突然、静かな暗闇のカーテンを引き裂くように、圧倒的な光が彼らを包みます。その光と共に、神の御使いである天使は姿を現し、恐れおののく羊飼いたちに、救い主イエスの誕生を高らかに告げたのです。と、ここまで聞いて、もしくは読んで、果たして皆さんは、そんな光景、情景を想像できるでしょうか。

現代を生きる私たちからすれば、そもそも羊飼いいという職業自体がピンとくるものではありませんし、羊だって来年の干支ですけれども、いわゆるイラストなどの羊はイメージですが、群れのようなのものはなかなか見る機会もないですし、天使と言われても、これまた現代社会に生きる私たちからすれば、とても現実的にはとらえにくいものです。

「闇」と「光」

ここでたった一つ、皆さんに想像してほしいのは、「闇」です。今強く目をつむって、その上から手のひらで覆って闇をほんの少し体感するのもいいですし、アウトドアでのキャンプ経験がある方なら、キャンプでの夜を想像してみるのもいいかもしれません。

また、闇というのは、言葉としては違法なものや道徳的ではない行いについても使われる言葉です。戦時中の闇市ですとか心の闇、社会の闇というような表現もあります。

そういった暗い闇。神話や宗教の世界ではこの闇と必ず対照的な存在として描かれるものがあります。それは「光」です。

そう、この場面で描かれているのは真っ暗な闇と、そこに現れ、闇を照らす圧倒的な光の情景なのです。

「光」もまた、「闇」と同じで、単純に視覚的に「明るい」ということだけを意味するにとどまりません。

天使たちがもってきた光は、「救い主イエスの誕生」という、平和の光をこの世に灯す、そんな希望をその身体に詰めた赤子誕生のニュースです。そしてそれこそが、「すべての」人びとにとっての明るい「光」となり、闇を照らしたのです。

「平和」の光は灯される

残念なことに、私たちの生きる世界では多くの自分との「違い」を理由に争いが絶えません。自分の意見を通すことが、他を否定することとなっているのは非常に残念な、しかし日常茶飯事的に至る所で起きている、そして私達が起こしていることであります。

けれど、私たちが忘れてはいけない、また、この時期だからこそ必ず思い起こさなければならないことは、イエスの誕生の知らせは、「平和」を告げる知らせであったということです。

平和というのは、何も戦争がない、ということだけではありません。

人と人が争うことなく、穏やかに安心して過ごすことができる、それも平和です。

ではどうしたらそのような争いをなくし、平和を実現できるのか、というと、イエス誕生の知らせの後、天使たちが答えてくれています。

「地には平和、御心に適う人にあれ」。

御心、というのは「神さまの心」です。つまり、神さまの心に適う生き方をすれば、そこに平和はおのずと生まれる、訪れるということです。

神さまを知る日

日本では「ジングルベル」をもじって、「シングルベル」という自虐ネタもあるように、クリスマスはカップルで過ごす意味合いがどうしても強いのですが、クリスマスとは、今から約2000年前に、イエスという一人の男の子が、救い主としてこの世に誕生したことを祝う記念日です。

イエスの誕生という出来事を通して、私たちは神の存在を知ることができます。何故なら、イエスは神の子として、この世に生まれたからです。そして神の存在を知る、ということ、は、私たちが人の目ではない、神の目を知ることです。

誰も見ていないからいいや、誰かにバレなければいいや、と私たちが考え、することの多くは争いの種を蒔く行為でもあります。しかし、私たちが人の目でなく、神の目を知るのならば、「バレなければいい」などということは絶対にありえないのです。神は、私たちがどのような時であっても、私たちを見ている存在だからです。

天使の言葉を聞いた後、その言葉を信じた羊飼いたちは飼い葉桶の中で眠る小さな小さな赤ん坊を探しあてることに成功します。その赤子は、本来であればあり得ない、馬小屋の飼い葉桶の中に置かれていました。それは、人の目には小さく、弱く、そして貧しい存在であったかもしれません。しかし、平和は、このような小さく弱く貧しい存在によって、もたらされるもののなのです。

私たちは目に見える大きく、勢いのある、強いものに心惹かれ、奪われます。しかし、私たちを本当に変えるものはそのような大きなものとは限りません。むしろ、羊飼いたちが見た、小さく弱く貧しいけれど、自分のすぐ側にある、私たちのすぐ隣にある、そんな確かな希望の光が、私たちを変え、平和を作る原動力を生み出すものとなるのです。

隣にある希望の光

聖書には、特に、イエスの生涯とその活動を記した新約聖書の福音書には、そんな風にして小さく弱く貧しく生まれた希望の光が、どのようにして人びとを照らしたかが記されています。

よく、聖書には何だかハッピーな幸せなありがたいお話が書いてあると思っている人がいるのですが、実は全くそうではないのです。どちらかと言えば、すごく不公平で理不尽な状況にある人たちの話を、私たちは聖書のなかにたくさん見ることができます。

馬小屋で生まれ、「イエス」と名付けられた赤子はその後、当時の社会において、苦しんで絶望の淵に追いやられていた人びとに近づき、寄り添い、同じ時間を過ごします。

「愛の反対は憎しみではなく、無関心だ」と言ったのはマザー・テレサですが、当時社会の隅に追いやられ、誰からも顧みられないことに絶望を感じていた人びとの心に希望の光を灯したのは、イエスとの交わりでした。

そんな、イエスによって与えられた希望は、聖書のなかではしばしば「救い」という言葉で表現されます。「私はイエスによって救われた」というとき、それはイエスによって真っ暗な絶望の世界に希望という光がもたらされた、ということなのです。

たった一人でも、自分を見てくれる人がいる、自分を受け入れてくれる人がいる、という事実は、どれほどその人の大きな希望の光になったか計り知れません。そして、それこそがイエスが最も伝えたかった「神の愛」というもののなのです。その愛こそが、果てしなく続くと思われるような苦難を耐えうる、そして試練に耐えうる力である希望となるのです。

愛や希望と聞くと、つい私たちは大げさな、派手でゴテゴテしたものを想像してしまいがちですが、忘れないでください。

この世に約2000年前に誕生したその象徴は、小さく、弱く、貧しい姿で私たちの世界に現れました。

希望とは私たちから遠く離れた、手の届かないようなものではありません。実は、私たちの近くに、すぐそばに、隣に、今もその希望はあるのです。そしてその希望の存在を知ることが、愛を紡ぐことに繋がるのです。

平和の光を灯しに行こう

救い主の誕生を知り、それを見に行こうと行動し、居場所を探し当てた羊飼いたちの姿勢は、実に積極的です。

私たちも、平和の知らせをただ安穩と受け取るのではなく、私たちが生きるこの地に平和を実現するために、自分が何をすればよいか、そのことを神さまに問い、祈り、神の御心を尋ねて、自分にできることを実行していきたいと、そして平和を一人ひとりの手で、作り上げていきたいとそのように願います。イエスによって生まれた希望の光が2000年の時を経てなお、人びとの心に灯されている事実を覚え、その光のもと、歩んでいきたいと願います。

2014年12月17日 京田辺水曜チャペル・アワー「アドベント讃美礼拝奨励」記録